



8月3日・4日に肱川河原で開催される大洲川まつり花火大会。2日間で約4,000発の花火が打ち上がる



うかいは、6月1日から9月20日まで開催される。屋形船は貸切船、乗合船の2種類運航



肱川や流域の魅力を五感で堪能する屋形船



伝統と風情の肱川。

花火、うかい、いもたき 肱川が育んだ風物詩

肱川は季節の風物詩の舞台にもなっている。その一つが、盛夏に開催される「大洲川まつり花火大会」だ。人々は肱川の河川敷や大洲城など思い思いの場所に集い、ドーンという音とともに夜空に咲く大輪の花火を鑑賞する。また、昭和32年に始まった「大洲観光うかい」は、日本三大鶴飼の一つに数えられており、全国で最も長いコースを屋形船で下るのが特徴。夕暮れ、屋形船に乗った見物客は、船上で料理に舌鼓を打ちながら、酒を酌み交わす。周囲が闇に包ま

懐かしい町並みを ゆつくり、のんびり 人力車でお散歩

中世から城下町として栄えた大洲でもっとも早くから開けたのが肱南地区。そして、その繁栄の象徴が「おはなはん通り」だ。昭和41年に放映されたNHK朝のテレビドラマ「おはなはん」のロケが行われたことから、その名が付けた。石畳を敷き詰め、鯉の泳ぐ水路がある町筋に立ち並ぶ白漆喰壁・土蔵造りの建物は、明治から大正にかけて建てられたもの。まさにドラマのセットのような場所だが、今も、人々が穏やかな暮らしを営んでいる。

この「おはなはん通り」から志保町通り、恵美須通りへと続く「帯は、それぞれ異なる風情を残しており散策にぴったり。恵美須通りの東側北端は、質実にして気品漂う武家屋敷や、なまこ壁で飾られた土蔵などがあり、「明治の家並み」の通り名で知られる。界限を違った目線で旅するなら、「大洲の町並み・観光人力車」がおすすすめ。ゆつくり、のんびりとしたスピードは、懐かしい町並みによく似合っている。

れると、赤々とかがり火を焚いた鶴船が登場し、鶴匠に操られた鶴が水中で鮎を捕らえる。鶴匠と鶴の息のあったパフォーマンスと川面を渡る風は、夏の暑さをしばし忘れさせてくれるだろう。

肱川は、8月下旬の初煮会に始まり、10月下旬まで開催される「いもたき」の舞台でもある。河原に置いた大鍋では、大洲特産の夏芋（里芋）やコンニャク、鶏肉、シイタケ、油揚げなどをダシで煮込む。この鍋を仲間とともに囲み、酒を酌み交わすことで親睦を図る風流な行事だ。肱川とともに暮らす大洲人ならではのコミュニケーションといえるだろう。



がいな

大洲人

鶴匠（日本で2人目の女性鶴匠）
佐々木コズエさん

私は肱川のそばで生まれ、縁あって肱川を仕事場とすることができました。肱川は岸辺から眺めても美しいのですが、船に乗り、その懐に抱かれると、何とも言えない安心感を与えてくれます。私たちの務めは、この美しい川を次世代へと引き継ぐこと。いろいろなものが急激に変化する中、何時までも変わらない存在であって欲しいです。